

「集落活性化県民討論会 in 福島」討論概要

- 1 開催日 平成22年11月19日(金)
- 2 開催場所 杉妻会館 4階「牡丹」
- 3 主な意見等

【集落調査を行った大学生】

親が転勤族で「ふるさと」を知らなかったが、今回の活動を通じて「ふるさと」がどのようなものなのか、感覚を掴むことができた。

学生と一緒に活動していただいたことにより、地区住民の活気と積極性が強くなったと感じる。

集落の高齢化が進んでいるので、50代以下の人たちに集落に帰ってきてもらえる環境を作らないといけない。農業で食べていける環境、定住できるような環境を作っていきたい。

継続的にこれからも若者が地域に入ってくるための仕組みづくりを考えていきたい。

2年間の活動で見えてきた課題としては、学生と集落との関わりをどうやって継続していけばよいかということ。経済的な面でも、県の委託事業が終了した後、どうするかということも課題。

集落の80代の住民の方に、自分が生きているうちに、こんなに多くの学生が集落に来て活動してくれるとは思っていなかった、多くの人を訪れたことで、まだまだ長生きできると言ってくれたことが印象に残っている。

どうやって大学の後輩達に活動を引き継いでもらうかが課題。

地区に住んでいるベテランの方たちは、年齢を重ねていても元気である。地域活性化には産業を盛り立てることも必要だが、人づくりも大切ではないか。

活動の継続については、大学内にこだわらず、いろんな所に志を持つ人がいるので、それらの人をNPO等を作って巻き込んでいければと考えている。ただし、自分たちが中心になるのではなく、その地域に住んでいる人が中心になった組織としなければならない。

【調査を受け入れた集落住民の方々】

学生の新しいアイデアと才能を、地域の活性化に活かしてほしい。

今回で築いた学生との絆を大事にしながら、集落の活性化に向けて頑張っていきたい。

大学生の調査により、当たり前と思っていた地域の魅力を見つめ直すことができた。

地区としては、大学生の受入によって、若者から高齢者まで幅広い世代がボランティアに参加するなどの効果が得られた。

大学生の提案を2年、3年と息長く続けていき地域を活性化していきたい。

都市との交流に取り組んでいるが、都市住民を乗せた大型バスが道路が狭く地区まで来ることができない。道路が便利になれば、もっと交流が盛んになるのではないかと思う。

地区に現在いる人で活性化を頑張っていかなければならないと思う。

後期高齢化の進行。これにどう対応していくのが課題。若者が地域に残ってくれば、自然と活力も生まれてくる。団塊の世代がしっかりしていくことも必要。林業の魅力や農業の魅力を発信していくことも必要。活性化にはお金もかかる。大学生と交流するためのお金もかかる。集落側の負担に対する県からの助成も検討してほしい。

その集落に入って生活してみたい、そのくらいの気鋭がないと、学生の活性化の提案は、よそ者の絵空事だと住民の人に思われてしまう。住民と一緒に生活したうえで、その地域の活性化をする、というのが本当。親身になって、集落の人々の気持ちを掴んでほしい。

親が子どもにこの集落では食っていけないと教育して、結果的に親だけが集落に残っている、というのが現状。自分たちの地域を、農業を評価できない、というのが一番の問題。

高齢化が進んでいる集落に行つての大学生のボランティア活動により、高齢者の方たちの笑顔を作っただけでも、大学生の人生のいい勉強になったはず。

【大学関係者】

大学生の後継者を見つけていく方法として、この活動を通して第二のふるさとができるという点と、就職活動のなかで、このような活動をしてきたことが企業側にも良い印象になるという点をPRしてはどうか。

【司会】

集落を活性化するためには、外から学生が入ってきたことをきっかけに集落を見つめ直すことが必要。集落が踏み出せない一歩を後押しできるのが、学生であり外からの力である。

学生が2泊3日入つた程度で集落の活性化は難しいが、ひとつの「きっかけ」になっていくという意義は非常に大きい。

「集落活性化県民討論会 in 会津」討論概要

- 1 開催日 平成22年11月22日(月)
- 2 開催場所 会津若松ワシントンホテル 2階「双鶴」
- 3 主な意見等

【集落調査を行った大学生】

これからは、農業でお金を儲けるような仕組みを作ることと、地域に若者に帰ってきてもらえるようにすること、をテーマに活動したい。

地区の若い世代との交流を行うことによって、地区内における世代間の交流の大切さを認識した。

その地区に住んでみたいと思っている人に対しては、地区で行うイベントに参加してもらうという方法が有効。参加することにより、地区住民との交流が深まる。

【調査を受け入れた集落住民の方々】

高齢者が農業の支えとなっており、20代～50代をいかに地域に引き戻すかが課題。

集落の現状を直視し、10年後を考えて何をすべきなのか、これまでその話し合いをしたことがなかったが、学生が調査に入ったことをきっかけに話し合い、行動を起こす人が出て来た。

何が集落の活性化につながるのか、学生が考えた活性化策や意見を取り入れながら、共に考えて集落の活性化を進めていきたい。

学生と地域のリーダーだけではなく、周りの皆で連携して前に進むことが大切。

普段は静まりかえった集落に大学生の声が入り、高齢者たちが元気をもらった。

受入側が大学生の調査の趣旨、手法、何をやるかななどを十分理解することも必要。

また、地元自治体との連携も必要である。

〔テーマ別討論〕

大学生の調査方法について

【集落住民】

回数を多く又は長期間集落に入ってもらい、深みのある調査をして欲しい。

また、受入側も大学生に負担が掛からないよう空き家や食事を準備するなど、受入体制を工夫すべき。

【大学生】

自分たちは、できるだけ集落に行くのを我慢している。自分たちはあくまで「よそ者」として集落に入っており、馴れ合いにならぬよう注意が必要。外から集落を見られるような立場を維持したい。

【集落住民】

地域住民に大学生の調査趣旨を徹底できなかったことが反省点。単年度ではなく、来年、再来年と大学生の活動を継続して欲しい。

【大学生】

集落の方が我々に期待していただくのは非常にありがたいが、馴れ合いになってはいけない。自立と依存をはっきり分けるべき。

【大学生】

学生が何のために集落に入るのかを意識することが大事。良いところや課題を発見することは必要だが、どういう視点から見るのかははっきりさせる必要がある。居住地としてか、観光地としてか、産業という視点からなのか、目的をはっきりさせた上で、どのような頻度でどのような調査を行うのか計画を立てれば、より良い調査が可能。

【集落住民】

何もないと思っていた地域に、大学生の外部からの視点が入ったことで、地域が活性化への準備体制に入れたことに意義がある。

活性化の提案内容について

【大学生】

それぞれの活性化の提案の中で、どういう意図で「活性化」という言葉を使っているのか。我々の提案では、行事自体にイベント性を持たせ、行事参加者を増やし、地区を周知していくことで、地区に愛着を持った人を増やしていくことが活性化につながる、というような意図である。

【大学生】

「活性化」については、生きがいづくりをしようという意図。最終的には、経済的なインセンティブが付いた上で皆で楽しく仲良くやっていける場が作れればと考えている。

【大学生】

提案したイベント開催の意図は、住民の方が主体的に動けるようになるということ。小さなことでも自分たちでできるんだということを再認識してもらうだけでも、活性化と言えるのではないか。

【大学生】

提案は、まず生きがい拠点を作るという考え方。集落の住民がいきいきと楽しそうにやっていることを見せることで、子・孫の世代、他の地域の人への広がりが生まれるのではないか。

【大学生】

最終的には活性化により観光地にしたいと考えているが、まずは今あるものを維

持して無くさないようにしていく、そのためには何が必要なのかを考え活性化につなげていきたい。

【大学生】

最終的な活性化は、50年後に集落が残っていることではないか。

【大学生】

活性化とは「精神的豊かさ」ではないか。文化や生きがい、人と人とのつながりが大事。産業を興すにしても外から人を呼び込むにしても、精神的豊かさが前提となる。ただ、活性化が何かはそこに住む住民の方が決めること。学生や行政はそのサポート役。

【大学生】

まずは町民の方に集落のことを知ってもらおうということでイベントを何度か開催した。イベントを開催して、この集落に住んでみたいと思う人を増やすこと、また、集落側では受入の体制づくりをし、集落に住んでもらうという方向で活性化を考えていきたい。

【大学生】

地区を外部に知ってもらおうということになると、何らかの戦略が必要だと感じた。

【集落住民】

経済的豊かさがないと、真の活性化はない。食べていける農業、サラリーマン以上の収入を得る農業のためには、どうしなければならないのかを考えていきたい。大学生が集落に入ってきたことにより、新しいアイデアが生まれてくる気がする。

【集落住民】

活性化とは、住民が共通の目的意識を持って活動すること。自分のふるさとに自信をもって次世代に伝えていくために、何をすべきかを住民が考えて行動することが活性化。

【集落住民】

活性化とは、社会状況の変化に対応できる準備体制の一部。今は地域に誇りに持てず地域資源を有効活用できていない状況。学生の考えを情報源に、地域資源を活かした産業を興していくための準備をできることが活性化。

【司会】

「きっかけ」づくりとして共通している「イベント」の実施について、イベントを実施する主体は誰かなど含め意見はあるか。

【大学生】

各地区には公民館や生涯学習センターがある。そこで実施する生涯学習事業を有効活用し、集落の方と公民館職員がうまく連携してイベントを実施すべき。

【大学生】

イベントの性格・趣旨を明確にした方が、イベントに行こうというインセンティ

ブが生まれる。また、食べる、叩くなど、五感で体感するイベントの方が他と差別化が図られて良い。

【集落住民】

イベントは、地域再生の「きっかけ」づくりであり、イベント自体によって地域が浮揚することにはならない。また、集落の活性化を考えたとき、自治組織には二十歳くらいから大人までの全員参加が参加し、さらには女性を入れて積極的に意見を聞くべき。

活性化とは何かについては、安心・安全・楽しさを感じる、心の豊かさを感じる集落、自分の集落に自信を持つことが活性化。

【大学生席】

会津の中山間地域を中心に棚田オーナー制度をゼミで実施。継続的にオーナー制度が続くように大学側がサポートしていくことと、地域住民が自主的に活動していくことが大事。イベントの実施については、地域ごとの違いを発見するなど個別化を図りながら計画していくことが大事。

学校校舎を活用した拠点づくりについて

【集落住民】

大学生からは、休校を活用したレストランの提案があったが、急にはできないというのが集落の現状。集落にある湧き水の活用など、提案の中からはまずできることに取り組んでいきたい。

【集落住民】

地域の拠り所、住民の心の拠り所である学校施設は、利活用を検討してみることをぜひ勧めたい。

【司会】

学生が入ったことにより、自分の集落を見つめ直し5年後、10年後を考えるきっかけができたことに意義がある。

提案内容について踏み出してみることも大事だが、どのような方向に踏み出していくかを学生と集落で深めてもらいたい。

行政に関しては、今回の集落にとっての「きっかけ」を点で終わらせず、面に広げていくため、県のモデル事業で終わらせるのではなく、市町村が集落の活性化にとって意義のあるものとして位置付け、継続的に取り組んでほしい。